06　ソフトウェア作りには、画像や音楽などを会社のデータベースから引き出して合成しているが、会社にないデータについては、ソフトウェアライブラリセンターのデータを使うこともある。センターのデータには著作権が設定されているが、著作権者への使用料は、会社がセンターへ支払い、センターがまとめて著作権者にきちんと支払ってくれるため、後の面倒の心配なく安心して使うことができる。完成したソフトは会社へオンラインで送信する。

バーチャルスーパーでお買物

忙しいときのバーチャルスーパー

07　仕事の締切りが近くなったこともあり、昼食は冷蔵庫にあり合わせのもので済ませることにした。父には申し訳ないが、こんな時には相手が実の父であることに感謝したくなる。今のうちに忘れずに、今日の夕食と明日の食事の食材を注文しておかなければ。いつもは、自分でメニューを考えているが、今日はバーチャルスーパーの本日のお勧めメニューに従うことにした。バーチャルスーパーは、近所の小売店が始めたサービスであるが、今日のように忙しいときには、このお勧めメニューは調理方法も教えてくれるので大助かりである。ただ、高血圧の父のためには塩分を少し控えめにする必要があるが。メニューと何人分かを選択すると、自動的に必要な食材が表示される。これを冷蔵庫内の在庫を確認しながら注文する。オンラインで注文した物品の情報は、コンピュータネットワークによって地元の小売り店などに接続されており、商品は自宅へ配達される。支払いの方法には、テレバンキングで即時に振り込む、クレジット会社を通して決まった日にまとめて支払う、配達のときに現金か電子貨幣で支払うといった方法が利用できる。

08　電子貨幣は、カードに金額が記録された財布のようなもので、口座からおろしたお金が書き込まれる。商店の端末にカードを差し込んでパスワードを打ち込むと、支払い額が差し引かれ、あたかも現金のように使うことができる。残高が少なくなったら補充する。ただ、落とすと現金を落としたのと同様に紛失してしまうことになるので、書き込める金額には上限があり、日常の細かな支払い向きである。大きな買物をするときには、テレバンキングで相手の口座に直接支払うのが普通である。まだ、紙幣や貨幣などの現金も流通しており、冠婚葬祭のときなどには現金でないと格好がつかないが、日常の支払いは徐々に現金から電子貨幣に移行しつつあるようである。

便利になると困ったことも起きる

09　昼食を食べながらニュースを見ていると、電子犯罪の特集が報じられていた。それによると、ハッカーが他人の口座から預金を盗み出したり、偽造電子貨幣を使用するなど、様々な手口が紹介されていた。警察は、コンピュータに関する専門技術を持つ捜査チームを作り、捜査を進めているが、テレバンキングや電子貨幣の普及に伴い、最近、この種の犯罪の発生が社会問題になっている。セキュリティ技術も進歩しているが、犯罪を犯す側は、さらにその裏をかくように複雑な手口を考えつく。このように、情報通信の高度化は、便利であるとともに困ったことも起こすものだ。この対策のため、さらに信頼性の高いセキュリティ技術の開発や、厳格な罰則規定の整備が検討されているとのことであった。

生きた情報に価値がある

10　報介の学校もあと1か月で休みに入るので、そろそろ旅行の行き先を決めて、宿を予約しなければ。父が倒れてから初めての旅行であり、バーチャルトラベルに飽きた父も楽しみにしている。以前旅行したときに、旅行広告ネットワークを通じてホテルについて調べて予約をしたが、ホテル側の宣伝内容と実際との差にがっかりしたこ

とがある。そこで、今回の旅行は、旅行業者のデータベースを利用することにした。

11　旅行業者は、添乗員の報告やお客からの苦情の手紙などをデータベース化しており、普通の旅行ガイドなどではわからない、宿泊先や観光地に関する利用者の生の声を教えてくれる。今は家の改築を控えていることもあり出費を抑えなければならないため、節約型でいくことにした。予約したホテルは、安いだけあって建物は若干古いとのことだが、サービスに対する利用者の評価は高いそうである。部屋は夜に帰って寝るだけなので、古くてもかまわないし、あらかじめ古いことがわかっているのだから、この前のように腹が立つこともないだろう。若干の情報料がかかるが、楽しい旅行のためには安い出費である。旅行業者は、ホテルや切符の手配、主催旅行の販売などの従来型の業務も行っているが、自宅の端末から予約ができる今では、旅行の専門家として蓄積した情報販売のシェアも無視できない大きさになっているようである。

遠隔手続きで時間の節約を

12　計画中の家の改築は、父が自由に家の中を移動できるように、手すりを付けたり、簡易エレベータを付けたりすることが目的である。このような改築には公的な補助が出るようであり、地域情報室を通じて調べてみると我が家は該当しそうなので申請してみることにした。

13　地域情報室は、その地域のコミュニティ内の情報交換を目的に設立された営利組織である。学校や区役所などからの公的な連絡事項は無料で掲載される。契約家庭からは、「売ります買います」、「メンバー募集」、「ボランティア情報」など、各種の掲示板に情報提供するとともに、掲示情報は自由に読み取れる。企業や商店の安売り情報や新製品情報などは、情報掲載料を地域情報室を運営するネットワーク会社に払えば掲載され、契約家庭は無料でそれらの情報を見ることができる。また、他のネットワークへのアクセスもこれを通じれば簡単である。操作に自信のない人については、テレビ電話を通じてオペレータが代行操作してくれる。

14　地域情報室から申請書を呼出し、必要事項を打ち込んで、父の診断書、住民票や改築計画書などを添付して送信すれば手続きは完了である。診断書は電子メールで病院から取り寄せたし、住民票は区役所に転送先を指示するだけなので、電車に揺られて動き回る必要はまったくない。住民票や戸籍謄本などの個人データについては、プライバシーの問題もありその管理についてかなり激しい議論があったが、通信データの暗号化技術や本人確認技術が進歩したことで、今ではデータの漏洩の心配もなくな

り、足を運ばなくてよいので便利この上ない。もちろん、各窓口に出向いて書類を集めて、郵送で提出するという方法でも受け付けてくれるが、一度便利な方法を使ってしまうと、昔のやり方に戻るなんて考えられない。

地域の情報拠点は生活を便利にする

15　地域情報室の電子メールボックスをあけてみると、報介の学校から成績と家庭訪問の日程について電子メールが入っていたので、その返事を送信した。また、次回の町内防災訓練と草取りのお知らせが掲示されていた。返事は本日中に返さなければならないことになっているので、情二さんあてに参加可能な日を回答しておくように電子メールを送信した。

16　地域情報室は、○○区のどこかに置かれていると思われているが実態はそうではない。私の大学の同級生の何人かが、ネットワークサービス会社で働いているので知っているのだが、ネットワークというものは線でつながってさえいればよいので、○○区のデータを管理している地域情報室のコンピュータ本体は、ビルの賃貸料の安い地方に置かれており、○○区にはマーケティングも兼ねた営業窓口と、ハードウェアの保守要員だけが駐在している。テレビ電話の画面に出てくるオペレータも地方の居住者である。このように、情報を使ったネットワーク産業は、地方の雇用作りに役立っているようである。

17　昔は、通信コストの高さが一因となって、一部のコンピュータ好きだけが地域情報室の前身だったパソコンネットワークに加入していた。しかし、光ファイバー網の普及による通信容量の拡大や高性能の交換機の開発に、通信会社やネットワーク会社間の競争も加わって、通信コストが低下していった。今では、通常の地域内通信はいくら使っても定額で、データベースの利用や操作代行サービスなどの特別なサービスは使った量に応じて、別途の料金が請求されるシステムになっており、地域情報室のようなネットワークに加入することは当たり前になっている。長テレビ電話をしても料金は変わらないし、誰かが電話中も空き容量を利用して他の人も通信ができる。便利になったものである。確かに、家計に占める通信費の割合は、私が子供の頃に比べて多くなっているが、受けているサービスの内容が格段に充実しているので、妥当な料金だと私は考えている。

18　その他に、多数のダイレクト電子メールが送られてきていた。確かに、紙のダイレクトメールの美しい印刷や手に持った質感は魅力的だが、一方で、音声や動画像が

組み合わされたダイレクト電子メールも、テレビのコマーシャルを各戸に配達するようなもので、よい宣伝になっているようだ。しかし、洪水のように送られてくるダイレクト電子メールが社会問題化することにもなった。しかし、頭の良い人はいるもので、それに対応するため自動電子メール選別システムが開発されたので、今ではむだな電子メールを読む時間を省けるようになった。また、電子新聞や電子本など書類の電子化を通じ、今では紙資源が有効に利用されるようになっており、環境保護の点で、情報化は大いに貢献しているのかもしれない。

在宅勤務には自己管理が必要

19　夕食の支度をする時間だ。昼前にオンラインで注文した食材のうち、野菜を馬場商店さんが、魚を近くの魚屋さんが運んできた。馬場さんが来たので、思い切ってボランティアのことについて相談してみることにした。我が家で父が寝たきりの状態であったときには、長時間の外出時は在宅介護ボランティアや、区立のデイケアセンターのお世話になっていた。近頃は在宅勤務にも慣れたし、父の病状も回復に向かい時間的ゆとりもできたので、昔の恩返しの意味を込めて自分も何かできないか考えるようになった。私の特技がソフトウェア作りであることを馬場さんに話すと、どうするのがよいかちょっと考えてみるとのことであった。

20　情二さんが帰宅した。父の相手は情二さんに頼んで、水泳教室に出掛けた。少々太り気味なのが気になっているので、健康維持と気分転換を兼ねて水泳教室に通い始めたのだ。情二さんは、近頃囲碁に凝っており、囲碁ソフトを相手に練習をしたり、オンライン囲碁教室で先生から直接指導をしてもらって腕を磨いているようで、今日は父を相手にその成果を試すらしい。

21　昔の会社の仲間と話をすると、「在宅勤務は上司の目を気にしなくてもいいので気楽だし、家にいるから楽でしょう」などと言われるがとんでもない、会社が割り当ててくる仕事は、片手間でできるような量や内容ではない。確かに、通勤をしなくてもよいというのは楽であるが、家庭と仕事をきちんと分けて自己管理しなければ勤まるものではない。今週は、旅行の計画作りやらで仕事の時間が少々くわれてしまった。納期が迫っていることもあり、明日は徹夜になるかもしれないので今日は早く寝ることにする。今日も1日が無事に過ぎた。セキュリティシステムのセットを確認して明かりを消した。

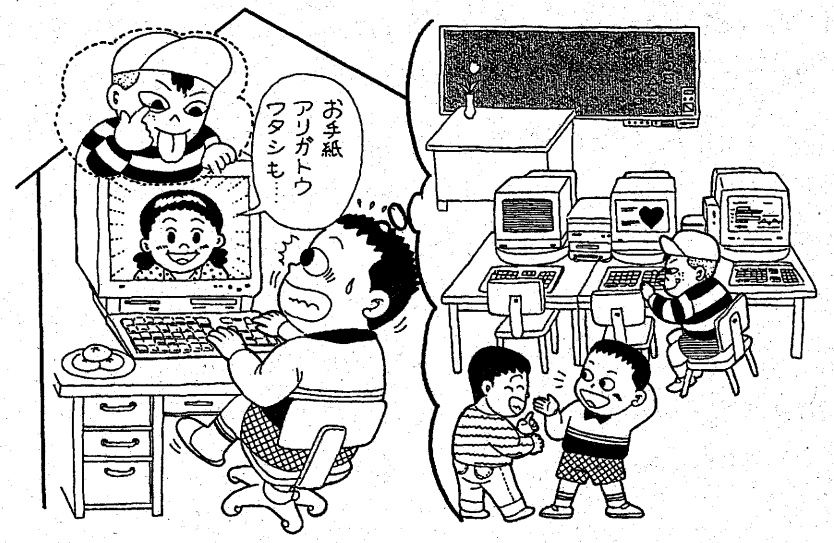
中野情二のある日

偽ラブレター事件発生

22　昨晩は、通江さんは納期に間に合わせるため明け方まで仕事をしていた様子なので、隣に寝ている通江さんを起こさないように気をつけて、朝食の支度に取りかかった。コーヒー、トースト、卵料理、サラダという簡単なメニューであるし、必要な材料は通江さんが買物しておいてくれているので、疲れているときに代わりに朝食の準備をするぐらいは、自分がわずかにできる家事分担であると思っている。

23　通江さんは疲れているだろうから、報介だけを起こして一緒に朝食をとることとした。テレビは、報介の好きなスポーツニュース番組を見ることにした。いつも報介は、好きなチームの試合になるとどんどん詳しい情報を引き出そうとリモコンを手元から離さないが、リモコンに手を触れようともしないので様子がおかしいなと思っていたら、相談があるという。

端末の管理は自分の責任



24　昨日、報介の電子メールボックスに、同じクラスの渋谷さんからのラブレターが

入っていたのだと言う。何を言い出すのかと思っていたら、報介が学校の端末で校内ネットにつないだまま席を離れたときに、友達の神田君が報介の名前で渋谷さんに手紙を出したことが始まりだという。渋谷さんのことは、嫌いというわけではないが、好きでもなんでもない。しかし、渋谷さんの喜んだ顔とメッセージを見てしまうと、今さら神田君のいたずらだとは言えない。もともと、端末の管理をいいかげんにしていた自分にも責任があるのだし、どうしたらよいかという相談であった。

25　情報通信に関する教育は学校でも十分に受けているのだろうが、このような経験をしたときが良い機会であるので、情報の管理や通信のルールについて、時間をつくって話をした方がよさそうだ。本人確認技術の進歩は著しく、重大な情報を扱う場合には指紋照合などが使われたりするし、電子メールボックスのようなものは簡単なパスワードで開けることができる。しかし、どのようなシステムでも１度本人が開けた後は誰でも使うことができるので、離れる前にシステムを閉じる癖をつけることは大切である。

通勤ラッシュは昔のこと

26　義父にあいさつをして、報介と一緒に家を出た。駅までの徒歩10分を含めて通勤時間は約１時間である。複々線になってからずいぶんと便利になり通勤時間も短くなったが、今のように着席するのが当然と期待できるようになったのは、いつ頃からであろうか。

27　混雑は、通勤と通学が原因であったが、在宅勤務やサテライトオフィスの普及とフレックスタイムが一般化し、官庁関係が新首都に移転を始めたぐらいの時期に、通勤客が減り始めたと記憶している。自分が住んでいるような、古くから住んでいる人が多い町はそれほど大きな変化はないが、旧首都圏全体で見ると、転出者が増えるにつれ住宅の取得が容易になり、昔より広い家に安く住めるようになっている。一方の通学であるが、大学レベルの専門教育や英会話スクールなどには、遠隔教育の利点をうまくいかしたものも多い。しかし、集団や社会のルールは、生徒同士の人間関係を通して身に付けていくものであり、遠隔教育では教えられないことであるため、基礎教育レベルでの通学はあまり減っていない。

28　朝のニュースで好きなチームが勝ったのを確認したので、イタリアのサッカーリーグのゲームを携帯テレビで楽しんでいると、隣から女子高生が携帯型端末のテレビ電話で話をしているのが聞こえてきた。列車内の混雑がなくなったせいなのか、機械

の性能が向上して話し声が小さくなったせいなのか、車内で通話をしている人を見かけても、以前ほどはやかましいと思わなくなった。しかし、古い世代である自分は、駅に着くと応答拒否状態にすることを習慣としている。相手はメッセージを残してくれるし、文字情報に変換してくれる人も多い。

自分に合った働き方で

29　自分は、総合建設会社で技師をしているが、去年、ビル建設の現場から関東支店に転勤になり、現在は企画部で公共事業を担当している。設計図や見積りの作成、経理などの専門的な部門では、在宅やサテライトオフィスでの勤務比率が高いのに比べ、企画調整部門はヘッドオフィスに出勤することが多い。設計担当は、週に１度の打合せ以外には自宅やサテライトオフィスから会社のサーバの中の設計図にアクセスして仕事している。時には１枚の図面を別々の場所にいる数人が同時に作業して仕上げることもあるらしい。自分が大学で勉強した頃には、土木、建築、機械といった分野ごとに設計図の書き方がバラバラであったが、CALSによる情報の共有化のため、今では書き方が統一され効率的になっている。しかし、企画調整部門のように交渉や打合せの多い部署では、ヘッドオフィスに出勤する方が効率的に仕事ができる。

30　前世紀の終わり頃、自分たちの少し上の世代では、情報通信の高度化が急激過ぎて落ちこぼれてしまうのではないかという不安もあった。確かに初めの頃は、大学を出立ての若い自分でも閉口するほど機器の操作が面倒であったが、メーカーが次々と使いやすい機械やソフトを開発してきたこともあり、一度便利な方法を知るとさらに便利な方法を求めるようになって、誰もがいつの間にか情報通信機器のない生活など考えられないようになってしまった。自分の上司もパソコンなんかには触らないと公言していたが、進歩派の当時の副社長の号令で「役員への報告は電子メールとする」と決まっては、あきらめざるを得なかった。いやいやながら研修を受けていたが、２週間後には自由に使いこなしていたことを思い出す。

31　オフィスに着くと最初に仕事用のアドレスに送られてきた電子メールを眺めるのを習慣としている。もちろん、忙しいときには自宅や電車の中から呼び出して読むこともあるが、自分はオフィスに到着してから業務用の電子メールボックスを開けるのを習慣にしている。フレックスタイムで勤務時間を自分で管理するようになってから、仕事の開始時に電子メールボックスを開けることと、終了時に翌日の部下の予定を確認し自分の予定を登録することを、仕事の時間の区切りとしている。